

論文

造形表現における e ラーニング教材について

児玉 太一¹⁾

キーワード：造形表現, 幼児造形, 図画工作, 美術教育, オンライン授業

要旨：本研究は本学こども育成学科の学生を対象とした、造形表現科目のオンラインにおける学習支援を目的とした題材の制作と研究である。絵や工作などの造形表現の活動においては、絵の具をはじめとする画材や用具の使用が前提であり、コロナ禍における学生の自宅待機期間には、最小の材料や用具で題材を提示する必要がある。この状況下において、全国各所で実践されていた様々な題材の事例調査や美術・造形教育に関わる教員との情報共有を行ない題材の選定を行なった。本論では筆者が取り上げた題材と、VOD によるオンライン授業の制作方法について示すとともに、結果としての学生作品とワークシートから考察を行なった。

1. 研究の経緯

新型コロナウイルス感染拡大の影響に伴って発出された緊急事態宣言以降の 4 月 8 日、全学の閉鎖に伴い、本学こども育成学科においても全教科目を対象に、5 月 17 日までの期間内、急遽のオンライン授業へ移行することとなった。学生のオンライン授業の支援方法や学生の状況、その経緯については本論の話題ではないが、全国の各大学においても同様の事態となり、筆者の担当する造形表現の教科目については当初より、実施方法と題材について苦慮することとなった。美術・造形の活動は基本的に対面型の授業における特定の用具・資材の使用を前提としており、学生に対してオンラインにおける十分な学習指導を行うことについては困難が予測された。

筆者は本学着任以来、絵や版画などの平面表現、幼児の造形遊びの題材について、学生のアクティブラーニングや授業内での素早い理解を促すために、特に理解の難しい手元の感覚的なプロセスに着眼した動画を作成し、学生への題材と知識の提供を行ってきた。全学的にオンライン授業へと移行した時点において、既に幼児と初等図画工作の題材である絵のモダンテクニックの制作方法や滲み絵などについては、全体のプロセスの動画を作成し、授業内の指導においても役立ててきた。しかし、本学のオンライン授業に際しては、事前に学生への材料の支給等の準備を行う間も無いまま、急遽の実施を余儀なくされ、これまで実施・蓄積してきた題材で対応できない状況が生ずることとなった。学生の多くが、基本的な描画材も手元にない状況に配慮し、可能な範囲での絵や工作の題材を提示・指導を行なうことも可能であったが、対面授業再開の見込みも立たなかった最中においては、これまでに無い題材の研究と、一層の創意工夫が強く求められていたといえる。

本論で取り上げる題材については、現地に赴いての直接の調査も困難である状況から、主に Web 上にあった題材や、他大学の教員との対話の中で手に入れることのできた情報や内容を元にして、本学

¹⁾ 山陽学園短期大学こども育成学科

学生にふさわしい形式にして配信を行なった。本論において、筆者が此度の状況に際して取り組んだ題材と結果としての学生作品、また、授業の制作方法について明らかにしたい。

II. コロナ禍における美術・造形表現におけるオンラインの取り組み

美術や造形の活動は、その大半が用具や資機材が必要な活動であり、講義形式の授業に比して、対面型の授業とは異なる対応が全国的に迫られる状況であった。その状況下にあつて、コロナ禍の比較的早い段階から個人や教育機関、美術館を中心に様々な実践の報告がされ、情報共有がされつつあつた。ここからは、様々な機関における実践の事例や状況について幾つかの事例を取り上げたい。

Facebook のコミュニティ「美術科教育を遠隔授業で行うために」[1]においては、退職者を含めた全国的美術科教員や、美術教育に携わる様々な出自を持つ人々の創意工夫が発信されている。Zoom を利用した鑑賞教育活動や、美術館など公的機関におけるオンラインの取り組みについて、多くの情報がコミュニティのメンバーに共有されており、SNS という今日的な媒体を介して、美術科教員をはじめとした美術教育に関わる人々の対応を逐次確認することができるコミュニティとなっている。

高度で専門的な機材が必要な美術系大学の取り組みとしては、京都市立芸術大学の版画基礎¹⁾におけるオンラインでの凹版画と平版画の教育の実践報告がある。事前に小分けにしたインク・ウエスなどの材料を送り、必要な機材として凹版用のミニプレス機の送付を行なっている。自宅から基本的な版の仕組みや制作方法、技法について学べるように学習支援を行ない、平版画では版となる石版を送付し、描画の終了した版を返送することで技法を学習する。

通常、版画などの技法行為においては、様々な技法を学ぶことが、作品の発想や当該分野への理解を促すため、専門の資機材のある工房での制作が重要である。あらゆる点で、優れた配慮がなされているが、本来は工房で学ぶべき内容をオンラインで実践すること、また、学生各自の自宅での美術の専門教育の活動がいかにかに困難であるのか、教員らの苦心と工夫の様子について窺い知ることができる。だが、そもそも美術系大学を卒業後の学生の多くが、この資機材を容易に得られない環境下に出ることで、以後の制作活動の継続の難しさに直面する。そのことを踏まえ、同大教授の田中は「学生にとって貴重な経験であったのでは」[2]ないかと述懐している。

一般に美術や造形の教育活動は、学校や大学で担われるものであると考えられているが「各学年の『B 鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を計ったりすること」[3]ともある通り、特に鑑賞教育を中心として、美術館や芸術センターが地域の美術教育の一端を担っている場合がある。特に公立美術館においては、美術教育の普及活動を通じた地域貢献を強く求められており、学芸員による鑑賞活動の支援の他、学芸員やアーティストによる児童向けワークショップが定期的開催されている。全国に美術教育の普及活動は多数見られるが、多くの美術館が感染対策として、美術館への入館自体を取り止め入館制限を行う中で、地域に還元されるワークショップなども中止を余儀なくされてきた。その中で茨城県の水戸芸術館は、2020 年の 4 月よりいち早く「おうち・こらぼ・らぼ」[4]と題したワークショップを企画・実施している。

「おうち・こらぼ・らぼ」においては、11 人のアーティストと企画した様々なグッズを販売・郵送し、アーティストの企画から制作活動を楽しみ、自宅から美術館とアーティストとのコラボレーションに参加できる内容である。この「おうち・こらぼ・らぼ」の企画に参加したワークショップユニット BOB ho-ho (ボブホーホー) の「郵便式 POST CARD」は現地に赴くことなく、制作と展示が一体になった活動を楽しむことができる。「郵便式 POST CARD」は、ポストカードと郵便切手がセットになったキットで、異なるデザインのポストカード 5 枚を使用し、元々印刷されているデザインに

触発されながら、好きな絵を描き、色を塗ることによって、それぞれの作品を制作する。制作した作品は芸術館に返送し、芸術館に届いた他の作品と組み合わせ芸術館の空間において展示される。このポストカードによる作品は、700枚程度が集まり、2020年に浜松で実施した同ワークショップ作品500枚と組み合わせ、1200枚が展示の予定となっている。対面が可能な通常状況下であれば、多くの美術館やセンターにおいて、制作から展示まで一連のプロセスを行う多種多様な取り組みを見ることができ、現在の状況下において接触を極力回避し、アーティストとのコラボレーションが実現できたという点において、稀有な試みであったといえる。

また、オンラインによる実践ではないが、愛知児童総合センターの「あそびのプログラム」においては描くこと、物を作ることだけではない、最小限の素材を用いて視覚のみにとどまらない様々な造形活動に取り組んでいる。新聞紙から気になる言葉を切り取ってしりとりを楽しむ[5]、細長い麺を揚げて偶然の線の形を楽しむ[6]、など色材や専用の用具が必要な活動として認識されてきた、造形表現における多彩なアプローチでの活動を展開している。

そもそも、近代以降の美術・造形の表現を振り返ると、絵や彫刻が中心であった時代から美術はメディア技術の発達と共に表現形態を広げ、設備や用具を必要としない（用いない）芸術活動も確かに存在してきた。サイトスペシフィックアートと呼ばれる表現は、アーティストが今、現時点に置かれている場の環境や空間、時間に応じ、そこでしか実現しない表現のことで、日本を含め各国において様々な表現活動が行われてきたものといえる。

III. 動画の制作方法

1. 撮影方法

前述の通り、筆者はこれまで手元の動作における理解の難しい制作に着目した動画制作を行ってきた。動作に注目した動画の制作にあたっては、手の動きを見やすい角度で、時に複数視点による撮影を行ってきたが、授業動画の作成にあたっては、全体のプロセスを俯瞰したeラーニング教材として撮影する必要があったため、基本的に制作する学生の視点にたった真俯瞰²⁾による撮影を中心とした。

真俯瞰撮影を行う機材としては、コピースタンドやポールの角度を変更できる三脚などが販売されているが、これらの三脚やコピースタンドはビデオカメラと被写体との距離を十分に取ることが難しい。そのため、簡易な方法ではあるものの、建材にカメラを括り付け、十分な高さのある乾燥棚等に設置し、距離をとることで撮影を行った。



図1 撮影の構成

また、学生が手元の活動に意識が集中できるよう不要な場の状況を排することを目的に、ホワイト

のバック紙を背景とし、映像の明るさと色褪りに配慮するため、窓側に機材を設置して、右側より自然光、左側からはLEDライトによる照明を施した[図1]。映像の明るさや色褪りについては、事後的に編集ソフトの中でも調整が可能であるが、教室内の上部からの照明によって生じる手元の影を和らげる目的もある。この撮影の際の画面の様子については、ビデオカメラとディスプレイを接続し、適宜、確認できるようにした。

2. 編集

筆者の担当授業は、他の講義系科目とは異なり、いずれも実際の制作活動が中心に据えられている。編集に際しては、制作に必要な最小の場面を切り取り、視聴に関わる時間がストレスとならないよう配慮する必要があった。また、こども育成学科の学生の大半がスマートフォンからの視聴が中心であることから、通信量の削減を目的に、環境の整わない学生への配慮として負担軽減に務める必要があった。通信量の負担軽減については、You Tube の画質設定から調節が可能ではあったが、誤って1080p相当の動画を視聴することを未然に防止するため、編集後のMP4データの書き出しにおいても、同様に通信量が軽減されるよう、視聴に問題のない範囲で画質の圧縮を行っている。撮影段階においての光線の配慮については前述のとおりであるが、撮影を行った教室の環境下においては色褪りが生ずるため、見やすい色彩となるよう、色温度や明るさなど色調補正を施した。

また、動画においては、撮影時の環境音の他は筆者からの解説音声のない、テロップ形式をとったものや、解説音声とテロップを併用した場合もある。音声を聞きながらすぐに活動に取り組むのではなく、学生はまず映像中に表示される字幕による一連の解説から制作を行うよう誘導を行った。

IV. 実践例

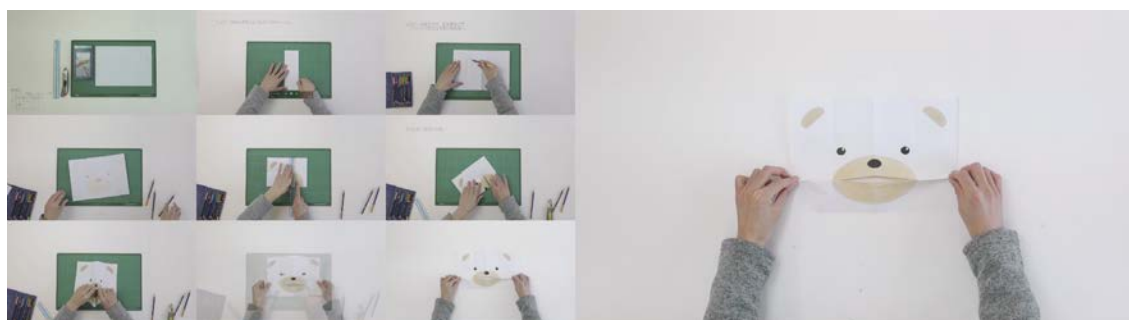


図2 パクパク人形の動画

1. コピー用紙によるパクパク人形

図2は1年生科目「工作」と2年生「図画」において学生に課した課題、A4サイズのコピー用紙を使用したパクパク人形の動画の各場面である。第1章でも触れている通り、急遽のオンライン授業の実施に際しては、学生の手元に画用紙や絵の具などの、造形に関わる多くの素材がない状況であった。対面授業においては、材料の支給や貸し出しが可能であったが、可能な限り学生が日常的に使用し、手元にあると思われる材料から制作活動が行えるようにするため、当初に課したのがコピー用紙を用いたパクパク人形である。A4サイズのコピー用紙と色鉛筆・ペンなどの色材、またハサミやカッターナイフがあれば制作可能な造形遊びとして、既に1年次において靴下や牛乳パックでのパクパク人形を制作していた2年生にとっては絵の活動の一環、1年生にとっては、1年次後期の表現IIAにおいて学習する平面から立体的にイメージを立ち上げるポップアップカードの取り組みへの前段階として活用

した。

2. 染め紙と団扇の制作

5月18日以降の対面授業再開後は、当初のような、材料などを手渡しできないという状況は解消されたものの、可能な限りの接触を控える目的から、対面とオンラインのハイブリッドでの授業運営となった。シラバス当初に予定されていた染め紙については、事前に活動のプロセスを収めた動画(図3)を配信していたが、紙を染める活動自体は教室内で実施し、団扇に仕立てる活動やワークシートへの記述については動画を分け、オンラインの課題として配信した(図4)。このように、複数回にまたがる活動については、配信と対面で活動場所を分けることによって対応を行ない、学習に滞りがないよう配慮を行なった。



図3 染め紙の制作の動画



図4 団扇の制作の動画

(3) 物で顔作り

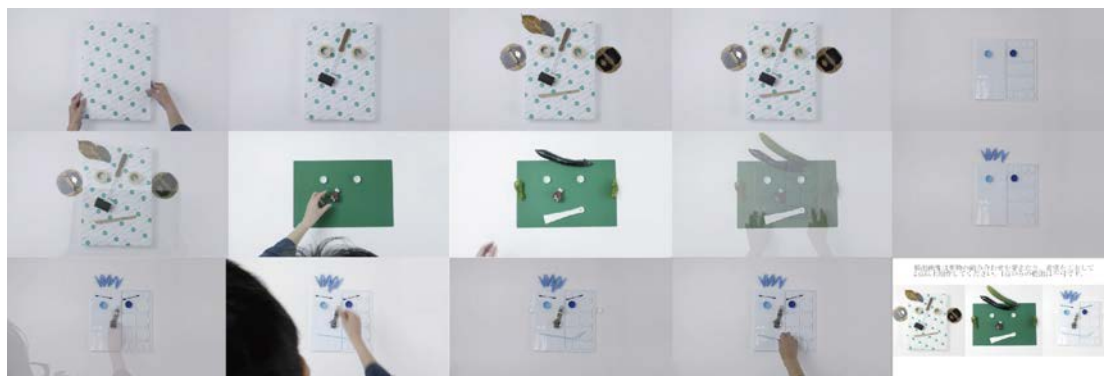


図5 物で顔作りの動画

通常用いる画材や用具を一切用いなかった活動として、図5の「物で顔作り」がある。本課題は愛知児童総合センターの取り組み[7]として紹介されていた題材を本学の学生に提供できるように、筆者が独自で制作した動画を1年次「工作」と2年次「図画」における課題として提示した。

異なる物同士を組み合わせ、貼り付けたりして立体物を制作する表現技法のことを、「寄せ集め」を意味するアッサンブラージュと呼称するが、本題材はこのアッサンブラージュの手法に類する表現であるといえる。対面での授業においては通常、物としての作品を制作し、提出するという過程を踏まえるが、「物で顔作り」においては接着を行わないため、本来は制作物として提出が困難な題材である。また、自宅にある様々な物を顔のパーツに見立て、撮影した作品をオンライン上で課題作品として提出するというプロセスそのものが、対面授業の代替としての授業ではない、オンライン授業でしか実現できない題材となったのではないかと考える。

V. 結果及び考察

1. 学生作品



図6 学生作品①



図7 学生作品②

ここで示したいいずれの作品もオンラインで配信した題材「物で顔作り」において制作した学生作品である³⁾。学生には、本課題の制作にあたって、1作品で活動を終えるのではなく、2作品以上の複数点を制作し、撮影した画像をオンラインから提出するように求めた。提出されたいずれの作品も、自宅にあった人工物・自然物など、あらゆる事物を組み合わせて、人などの顔を形作っている。

図6と図7の作品は1名の学生が取り組んだ作品である。図6においては、自宅にあった空箱やフック、洗濯バサミなどを顔のパーツに見立て、自身の周囲にある人工物を中心的な素材にして顔を制作しているが、洗濯バサミを空箱に挟んで耳に見立てている点において多くの作品と異なる。ただ単に、物を置くだけではなく、実際に使用できる用具の機能を使って顔を構成している点に学生の工夫や発見が見られる。また、図7の作品においては、アクセサリー等を入れるケースと思われるが、あらかじめ備わっている取手を耳に見立て、枯葉などの自然物やアクセサリーで全体を構成している。



図8 学生作品③



図9 学生作品④

図8の作品はスイカ・ピーマン・ゴーヤ・紫蘇などを、それぞれ顔を構成するパーツにした作品である。あらかじめあったものではなく、スイカを輪切りにするという日常の生活において発生した事柄から活動を行っており、スイカを顔の輪郭に見立てるほか、全体のパーツも食物のみで構成している点において、興味深い作品となっている。図9の作品は図8と同じ学生の作品であるが、人工物と

食物の組み合わせによって作品を制作している。いずれの作品も撮影という行為を作品の中に取り入れ、背景となるテーブルのシートの模様が作品の一部となるよう工夫を行なっている。

2. ワークシートからの考察

学生は自宅での活動として本課題に取り組んでいるが、作品と共に課したワークシートにおいては、題材の感想の他、園での活動に際しての導入や取り組みの方法について考察するよう求めている。

学生の感想として最も多かったのは、「小さい子どもの見立て遊びにつながる」「子どもは見立てるのが得意だと思うので、楽しいと思う」など、見立て遊びの題材として活用できるという感想であった。例えば、「子どもたちは、『あの雲、顔に見える!』など、何かを顔のようにとらえることがあるので、どんなイメージをつくるのか、興味深い」、「子どもが活動するとたくさんのアイデアが出て、大人が新しい発見ができると思った」など、実際に活動した際にどのように子ども達が素材からイメージを膨らませて活動するのか、また、保育者自身がどのような発見を得ることができるか、について期待する声がみられた。

題材の園での展開の仕方として、「置く位置、方向を少し変えることで表情が変わる点が面白い」「発想によって、普段の使い方とは違う形で見えてきたりして、子どもの方が想像が豊かなので面白い作品がたくさん生まれると思った」など、物の捉え方や、わずかな角度・位置の工夫によって、幾つもの作品が出来上がる点、「自分自身の顔の表情を鏡で確認しながら理解する機会にしたい」など、子どもたちの顔と見比べたり、確認しながら活動を行いたいという意見があった。

また、本課題を制作する場所について「園外保育などで拾った葉っぱや石などで作るのも良いと思う」、「子どもたちと散歩に行き、自然物で思い思いの顔を作る」、「身の周りにあるもので、短時間でできるため、この活動自体が導入に使えると思った」など、園内での造形遊びと園外活動を組み合わせ、1日の活動を想定して取り入れたいという意見もあった。

活動の導入に際しては、「野菜や葉っぱ、鉛筆などを1つずつ出しながら、使用するモチーフを紹介し、子ども達と活動を始める」という意見が見られ、気をつけなければいけない点として「家から物を持参すると紛失のおそれがあるので、保育室にあるもの、保育者が使えるものを準備する」、「5歳児には顔の土台となる物を選ばせて、難しい子どもには例を挙げて、選ばせるようにする」など、想定される問題や必要な援助についての意見があった。また、「友達同士で紹介し合う時間をつくる」や『『何か考えているのかな?』など出来上がった作品に対して感想を伝え合う』など、イメージの制作のみで終わらせず、制作と鑑賞活動を通じたコミュニケーションの場を設ける機会としたいという意見もみることができた。

VI. 今後の研究課題

本論では全国の様々な実践とその状況を示し、筆者のVODの制作方法と、実際に学生が取り組んだ題材について取り上げた。本論では取り上げなかったが、1年時の初回の課題において取り上げたフロッタージュでは、鉛筆やパス・クレヨン・コンテなどの描画材での制作方法について示したが、手元にある描画材が少ないため、鉛筆のみでフロッタージュを行なっていたり、身の回りの凹凸を探す活動も十分に考察した形跡が見られない作品が多数見られた。与えられた題材から、どのような工夫を行ったのか、活動への考察不足や課題をただこなしたのみという作品も見られ、例年に比して決して良い成果を上げたとはいえなかった題材もある。

一方で、本論の結果と考察で取り上げた「物で顔作り」は、全く資機材や描画材を用いない活動であ

る。学生のワークシートにも示されているように、自宅にある物の組み合わせや角度などによって無際限にイメージを膨らませることができ、活動自体も多くの子にとって目新しい題材であったといえるだろう。ただ多くの学びについて言えることであるが、特に造形活動は、制作中に学生同士で作品を見せ合い、触発されながら活動する身体的な経験が伴う学びである。この身体的な経験はオンラインにおいて十分に補うことは極めて難しい面であるといえる。全ての活動をオンラインで補うことはできないが、ハイブリッドや双方向での活動を含めながら、今後も学生へのフィードバックや題材と配信の方法については検討の必要があるだろう。

現時点においても首都圏や関西圏においては緊急事態宣言が継続されている最中で、感染の流行はいつ収束するのか、依然として不明な状況にある。幼児の造形活動におけるオンラインで活用できる題材は様々にあるはずであり、今後も持続的な研究とeラーニング教材の制作に取り組んでいきたい。

付記

本研究は、令和2年度 山陽学園大学・短期大学学内研究補助金（教育改革）による研究活動の一環として行った。この場を借りて謝辞を申し上げたい。

文末注

- 1) 京都市立芸術大学美術学部では、専攻別入試ではなく、デザインと美術の科別入試で選抜し、1回生前期に行われる総合基礎実技を経て、版画基礎や油画・彫刻など各科の基礎実技を半年ずつ履修する。油画・彫刻・版画などの専攻実技は2年次後期から本格的にスタートする。
- 2) 真俯瞰撮影はカメラを真下に向けて撮影する手法のことを指す。
- 3) 論文中の表現作品については、すべて論文掲載の使用許可を得ている。

引用文献

- [1] 「美術科教育を遠隔授業で行うために」 <https://www.facebook.com/groups/505119113499056> (2021年1月30日確認)
- [2] 田中栄子「オンライン授業-版画専攻の取り組み-」『2020 NO.71 同窓会報』,京都市立芸術大学, p5, 2020年
- [3] 文部科学省『平成29年告示 小学校学習指導要領図画工作編』, p148
- [4] 水戸芸術館「現代美術ギャラリー」
https://www.arttowermito.or.jp/gallery/lineup/article_5103.html (2021年1月30日確認)
- [5] 愛知県児童総合センター「しんぶんしりとり」『あそびワンダーブック 2010』, pp26-27
<https://www.acc-aichi.org/publication/awb-2010/> (2021年1月30日確認)
- [6] 愛知県児童総合センター「あげせん」『あそびワンダーブック 2018』, pp20-21
<https://www.acc-aichi.org/publication/awb2018/>
- [7] 愛知県児童総合センター「モノでかお」『あそびワンダーブック 2020』, p8
<https://www.acc-aichi.org/publication/%e3%81%82%e3%81%9d%e3%81%b3%e3%83%af%e3%83%b3%e3%83%80%e3%83%bc%e3%83%96%e3%83%83%e3%82%af2020/> (2021年1月30日確認)